

藤波祭主家の祖大中臣伊忠宛「後柏原天皇口宣案」

藤 森 馨

一、はじめに

國學院大學図書館では、神宮祭主大中臣姓藤波家の後裔藤波道忠氏より八五二点に上る所蔵文書を御預かりしている。現在、國學院大學日本文化研究所の「神宮祭主藤波家文書の研究」プロジェクトにより文書の整理・研究が進められており、平成六年八月には『藤波道忠氏所蔵文書目録』が刊行されている。

ところでこの度、本学の千々和到教授を介し、石島庸男・入間田宣夫両氏より、室町時代の藤波家当主大中臣伊忠の叙従二位を伝える貴重な「後柏原天皇口宣案」が、國學院大學図書館に寄贈された。藤波道忠氏所蔵文書の中には、近代の同家の当主藤波言忠のものを除き、近世以前の歴代当主の叙位・任官関係文書は一点も含まれていない。したがって、これまで、歴代当主の叙位・任官の年月日は、『公卿補任』や『祭主補任』及び他の記録から窺知できるのみであった。そうした中で、たとえ一点とはいえ、叙位年月日が明らかな大中臣伊忠宛の「後柏原天皇口宣案」の史料価値は高い。文書の性格を考慮し、所蔵すべき機関を吟味され、本学図書館に寄贈して下さった石島・入間田両氏に、まずは記して深く謝意を表したい。

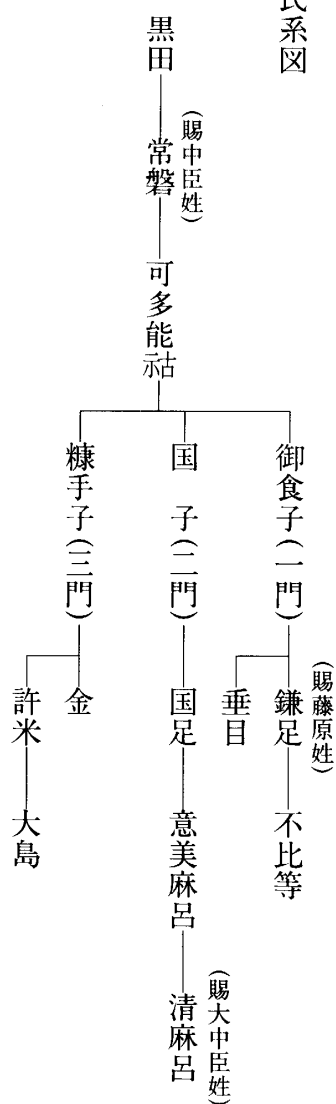
さて、以下本小稿では、本学図書館に新たに寄贈された大中臣伊忠宛「後柏原天皇口宣案」を紹介し、同文書によって知りえた伊忠に関する新たな知見について若干言及したい。

二、岩出流大中臣氏と大中臣伊忠

さて、大中臣伊忠宛の「後柏原天皇口宣案」を紹介するに先立ち、伊忠及び彼を生んだ岩出流大中臣氏の歴史の梗概について、若干触れてみたい。

大中臣氏は、周知のように歴代朝廷の神祇官に奉職し、伊勢神宮祭主をも兼帯してきた家柄である。その始源は天の岩戸神話で活躍する天児屋命と伝えられている。大中臣の名義は神と天皇との間を執り持つことに由来し、欽明朝に命の十九代の子孫常磐大連が、はじめて「中臣」姓をたまわった。その孫の代に、中臣氏は三門に分流したが、後世岩出若しくは藤波を家号とし、祭主職を世襲するに至るのは、国子にはじまる二門の系統である。国子の曾孫清麻呂は、朝儀・国典に通曉し、称徳天皇より神護景雲三年（七六九）に「大中臣」姓をたまわった。ついで、光仁天皇にも信頼され中臣氏に先例のない従二位右大臣にまで昇

大中臣氏系図



進し、大中臣氏発展の基礎を築いた。平安時代に入り、伊勢神宮祭主制度が成立すると、清麻呂の子孫である二門の人間が多く任命されるようになり、頼基・能宣・輔親と世襲化の傾向が強まった。特に輔親は、その妻が藤原道長の子教通の乳母であった関係から摂関家と深く結び、神祇官人としては稀有な上階を遂げ、正三位に叙され、神祇伯に任じられた。この輔親が神宮の祭祀を円滑に執行し、神郡及び周辺に点在する家領を経営するために設けたのが、伊勢に所在する岩出館である。子孫は平安時代

この間伊忠は、伊勢神宮内宮一禰宜にまで昇進した荒木田守晨と昵懇の関係を結んでいる。もとより祭主家と禰宜家との間柄であるから、その上下関係は明らかで、守晨は伊忠を主人と仰いでいたものと想像される。明応四年（一四九五）には伊忠が守晨に荒木田氏に相伝された「古代祝詞集」（神拝詞・諸祓詞・中臣祓・中臣祓天神祝詞・七種祓を所収）の書写を命じ、さらに永正年間（一五〇四～二一）には、曾祖父清世の代の応永八年（一四〇二）に書写された岩出流大中臣氏最大の家宝「寿詞文」を守晨に書写させている（2）。「寿詞文」は持統朝にはじまった即位儀及び大嘗祭の際に、奏上される「寿詞」本文である。寿詞奏上は大中臣氏最大の職務であり、古くは大中臣氏の長者が、平安時代以降は祭主任職者のみが執行できるものであった。換言するならば、寿詞の奏上は祭主任職者に付与された特権であり、この任を遂行することにより祭主及び大中臣氏長者の地位が保

証されたのである。ために、寿詞文の相伝の有無が、祭主職任免を左右したことも少なからずあった(3)。また、「古代祝詞集」に所収されている祓詞は祓の信仰が隆昌した中世社会にあって、その根幹をなすものであった。岩出流大中臣氏も祓の相伝を行っていたが、これもまた広義に解釈すれば、家の存亡に関わるものである。このような家の存亡に関わる家学の整理を伊忠は積極的に行い、戦乱のため式微した神宮祭祀の伝統存続に貢献したのである。

さて、前掲「祭主家乗」及び『公卿補任』によれば、伊忠は、

大永二年九月二日 辞祭主

同月十日 薨去

〔「祭主家乗」〕

(大永二年) 九月二日讓補祭主於二男大副朝忠、九月十日卒、

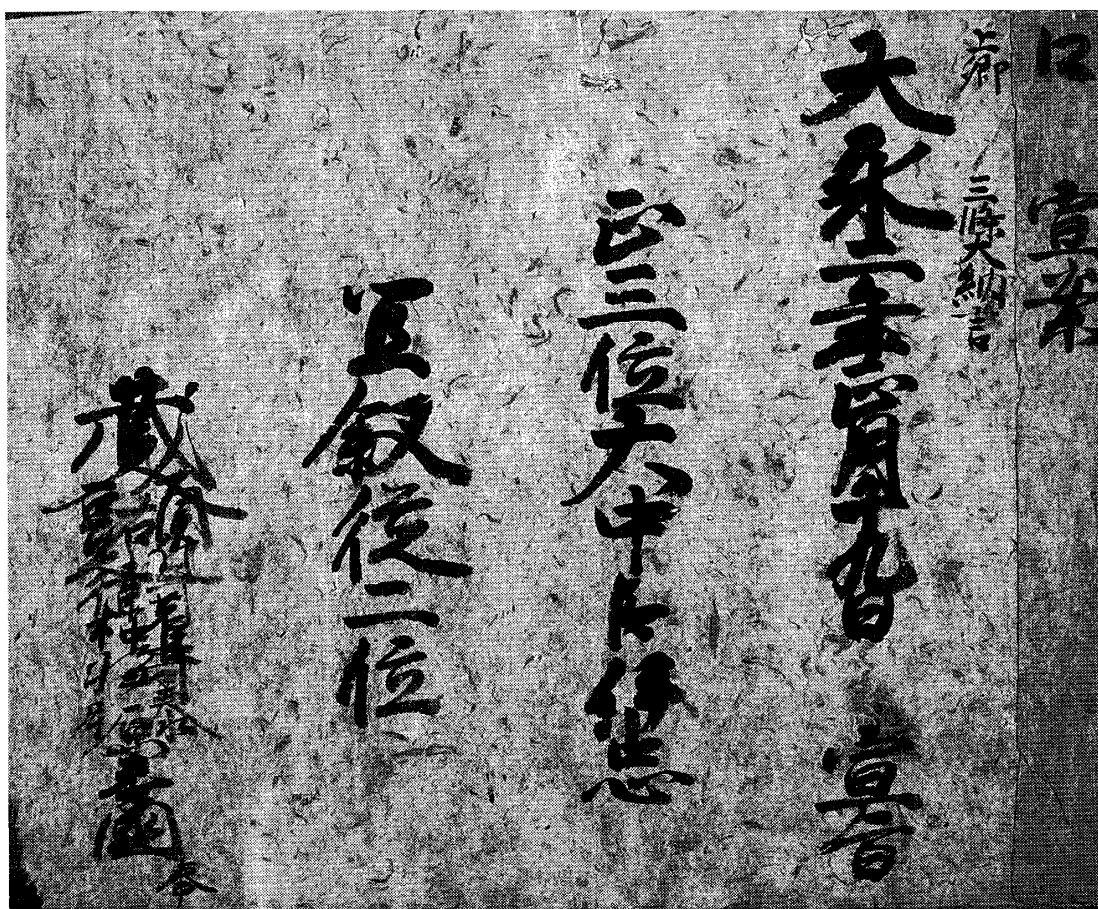
〔「公卿補任」〕

とあるように、大永二年(一五二二) 九月二日に祭主職を次男朝忠に讓補し、九月十日に薨去している。「祭主家乗」によれば、この薨去の年の正月十九日に、伊忠は従二位に叙位されている。この記述が正確であることを傍証するのが、ここで紹介する「後柏原天皇口宣案」である。なお、『公卿補任』の当該条の尻付には、「二月日従二位」と見え、伊忠の従二位昇叙は大永二年二月のことであつたと見える。この度寄贈された「後柏原天皇口宣案」により、藤波家に伝来した家伝「祭主家乗」の記述の方が『公卿補任』より正確であつたことが判明した。

三、大中臣伊忠宛「後柏原天皇口宣案」

写真を参照していただきたいが、本文書の料紙は宿紙で、現在黒紙で裏打ちされている。寸法は縦横三一・〇×四二・六裡で、端裏に「口 宣案」と銘が加えられている。内容は、

81 藤波祭主家の祖大中臣伊忠宛「後柏原天皇口宣案」



「口宣 案」

上卿 三條大納言
大永二年正月十九日 宣旨

正三位大中臣伊忠

宣叙從二位

藏人頭右近衛權中將藤原季國
奉

とあり、やや崩した楷書で書かれている。本文初行年号の右肩に書かれた上卿の三條大納言は三條公頼、本文書を執筆した藏人頭右近衛權中將藤原季國は滋野井季國のことである。さて、富田正弘氏は、こうした口宣案は弘安年間以前の後嵯峨院政の頃、人事に関する宣下の事実を、院から本人に院宣をもって知らせる際、これに口宣の写を添え送ることをもってはじまったと推定され、各時代における口宣案の様式の変遷を整理されておられる(4)。その中で、大中臣伊忠宛「後柏原天皇口宣案」とほぼ同時期の大永五年二月四日に東寺供僧真如院宗承に交付された「後柏原天皇口宣案」から、この時代の口宣案の様式的特徴を、

第一に、本文の書体は楷書ではあるが、近世のものほど硬くはない。第二に、上卿銘は写真(四)ではたまたま小さいが、近世では一般にかなり大きく書くから、それに比べればさらに小さく、第三には、端裏銘の文字の大きさも本文より小さくなっている。

とされ、さらに戦国期の口宣案の様式の全体的特徴について、

戦国期には、本文の書体が大きく、かつ料紙一面に行配りし、行間がちょうど一行分の間隔をとる。銘も楷書で書かれ、かなり大きくなる。

と述べられているが、伊忠宛の「後柏原天皇口宣案」も同様の様式上の傾向を具備している。したがって、本口宣案も、江戸時代に定まる口宣案の様式変遷史を研究する上で貴重な史料の一つに数えられよう。

さて、この口宣案によれば、大中臣伊忠の従二位叙位は紛れもなく大永二年正月十九日のことであったことがわかる。前にも触れたように、伊忠の叙位年月日は、『公卿補任』の二月説及び「祭主家乗」の正月十九日説と二説が並存していたが、この口宣案の出現により、正月十九日説が確実となった。こうしたことが明白になったことでも、本文書の価値は高い。

ところで、本口宣案により、いま一つ伊忠に関して興味深いことが想像される。それは、伊忠の居住地の問題であるが、このことに触れる前に、口宣案という文書の性格について、先学の研究を一瞥してみたい。

従来の研究は、天皇の勅旨を受けた職事が上卿にその旨を口頭で伝達する際に確認のため書いた案文が口宣案であるとする説(5)。口宣と口宣案を分け、職事から口宣を受け取った上卿がその原本を残し、別に一本の写本を作成してこれを受取人に交付

したものが口宣案であるという説(6)、以上二説が行われていた。だが、前掲の富田正弘氏により、口宣案は上卿が交付するものではないという新たな見解が現在提唱されている。富田氏によれば、口宣は天皇及び上皇の勅旨を職事から上卿に伝達する文書であり、別に職事がいま一通同文のものを作成し、その端裏に「口宣案」という銘を加え、本文初行年号の右肩に上卿の称号と官名を記し、綸旨及び院宣を添えて受取人に交付したものが口宣案であるという(7)。そして、口宣と口宣案とを分けるものが、「口宣案」という端裏銘と年号の右肩に書かれる上卿銘であるとされている。さらに富田氏は、口宣案の特徴として、その内容が人事関係に限定されていることを指摘され、

逆に全ての人事に関する事項が、口宣案でもって伝達されたかといえ、そうではない。まず、一般的に言えば、口宣を作成しない場合は、当然ながらその案文たる口宣案を作成できない。例えば、(1)授位、(2)任官について言えば、これらが叙位儀・除目儀として行われる場合、口宣はなく、したがって口宣案もありえない。また、除目と別に行われる任大臣も、同じく任大臣儀として宣命を宣制することによって行われ、口宣および口宣案はないのである。したがって、(1)授位、(2)任官に関しては、右の事例以外の臨時的に随時口宣で宣下される授位・任官(多くは四位・五位の授位、参議未満の任官)にさらに限定される。

と、述べられている。

富田氏によれば、口宣案が交付されるのは、「(1)授位、(2)任官に関しては、右の事例(叙位儀・除目儀・任大臣儀)以外の臨時的に随時口宣で宣下される授位・任官(多くは四位・五位の授位、参議未満の任官)」の場合に限られるという。大永二年は明応四年(一四九五)以後中絶していた正月五日叙位儀が再興された年である(『続史愚抄』)。もし、伊忠の叙位が、叙位儀による正式なものであったならば、口宣案は交付されなかったであろう。したがって、伊忠の叙位は富田氏が言われる臨時のものであったろうと推測される。ところで、口宣案が交付されるのは、臨時の場合でも叙位・任官対象の多くは四位・五位、若しくは参議未満、と富田氏はされている。しかし、伊忠の叙位は従二位で、高位の授位が口宣案で行われている。なぜ、このような高位の授位が、口宣案で行われたのであろうか。

東京大学史料編纂所には、勸修寺経逸によって安永五年（一七七六）三月三十日に製作された「口宣案類集」という書籍が一冊架蔵されている。表紙外題に「口宣案類集」とあり、形態は縦横一五×二三厘の横本で、綴は結び綴である。同書は室町時代以降に交付された口宣案を項目毎にまとめ、書写したものであるが、「神階」の項を見てみると、

上卿中山大納言

天正廿年十二月一日 宣旨

亀森神

宜叙正一位

藏人左少弁藤原光豊_奉

をはじめ、四例の遠隔地の神社への口宣案による神階叙位の事例が掲げてある。また、社家への叙位でも、「社家官位」の項目によれば、

長享元年十二月廿五日 宣旨

正四位下鴨信祐縣主

宜叙従三位

正四位下鴨継平縣主

宜叙正四位上

藏人左少辨藤原宣秀_奉

と、下鴨社の鴨信祐に正三位、鴨継平に正四位上の叙位が行われたと見える。神階の方は上卿銘が見られるため、口宣案であるのは確実である。しかし、社家官位の方は上卿銘が記されていない点と、一紙一件で記されていない点から、「口宣案類集」には納められてはいるものの、口宣案ではなく口宣である可能性も高い。したがって、高位叙位の口宣案交付の事例として掲げるのには、ためらいがある。だが、「口宣案類集」に納められているのは、社家への高位の官位授与が口宣案で行われる場合があった

ことを推測させる。だからこそ、鴨信祐と継平の事例が、同書に記載されているのではなからうか。このように遠隔地の神社や人物に、位階を授与する場合には、四位・五位に限らず相当な高位でも口宣案によって行われていた可能性が高い、と思われる。

四、社家上階の位置付け

さて、つぎに、その居住地とも密接に関わる大中臣伊忠への従二位叙位が口宣案によって行われた背景について考えてみよう。社家の上階は、伊勢神宮内宮禰宜荒木田氏成と外宮禰宜度会常昌が後醍醐天皇の元徳二年（一二三〇）に従三位に叙されたのが、その嚆矢である。しかし、彼らの上階は『公卿補任』には所見できない。理由は、いかに三位に登ろうと、遠隔地に居住する彼らの身分は、朝廷を構成する堂上身分には含まれていなかったためと推測される。こうした傾向は京都に近い賀茂下上社の社家の場合も同様である。前に見たように長享元年（一四八七）十二月二十五日に下鴨社家信祐が正三位に叙されているが、『公卿補任』にそうした事実を確認することはできない。この事例の他にも、『賀茂社家系図』をはじめとする系図類によれば、室町時代に賀茂下上社の社家が三位に預かっている事例を多く触目できるが、『公卿補任』には記載されていない。しかし、『公卿補任』に所見できないからといって、伊勢神宮禰宜の場合と同様、そうした事実がなかったとは速断できない。御所に近い賀茂社の社家の上階が記録されなかった理由は、彼らへの授位が朝廷を構成する堂上身分としてのそれではなかったためではなからうか。そうすると『公卿補任』への登載の如何は、朝廷との地理的關係のみならず、堂上身分であるか否かにも、大きく関わっていたということになろう。

祭主職にある岩出流大中臣氏の者が上階すると、元々が京官であったため『公卿補任』に記載される。しかし、たとえ上階したとしても、二条良基が『百寮訓要抄』の中で、

祭主、百官には入ざれども、次にしるし侍る也、伊勢大神宮の事をつかさどる。昔は可然人もなりけるにや、今は一向地下の者にて有なり、二位三位などになれども、昇殿などする事なし、

と揚言しているように、祭主職任職者は、あくまでも地下の待遇しか付与されていなかった。実際、中世の岩出館時代の祭主任

職者の身分を見てみると、定世と定忠父子が僅かに院昇殿を許されているのみである。朝廷での扱いは、伊勢神宮職官体系の頂点に位する家柄とは認識されていたものの、禰宜以下の神職と同様であった。歴代昇殿を前提とする堂上身分に岩出流大中臣氏が復するのは、祭主家の京都帰還後で、伊忠の曾孫慶忠が天正十六年（一五八八）に一旦逆退して、昇殿を許されて以降である。杜家の三位上階者は、『公卿補任』に室町時代後期頃から散見するようになり、江戸時代に入ると、克明に記録されるようになる。しかし、上階の際の記事に注目すると、堂上家の人物に比較して、経歴の記事が少ない。尻付に僅かに叙位月日といずれの杜家であるか、という記事が注記されているにすぎない。

そうした実例を、ここに見てみよう。『公卿補任』によれば、天文十三年（一五四四）には、日野町資將が二月二十四日に参議に補任され、三月九日には春日神主大中臣家賢が従三位に叙せられている。同書の彼らの叙位・任官に際しての記事に注目すると、日野町資將については、

故権大納言広光卿男（実外孫也、実故権中納言菅原章長卿二男）。母広光卿女。永正一五三九誕生。同十六正卅従五下（于時資雄。二才）。享禄二十二廿七従五上（十二才）。同日元服宮内大輔昇殿。同三正廿左兵衛佐。同五三一正五下。天文二九廿五位藏人（十六才）。同廿六日右少弁。同十一月五日改資將。同十六日禁色（今日侍中拜賀）。同三正五正五上。同四三廿一左少弁。同五十一一氏院别当。同十二月廿九權右中弁。同六十八右中弁。同七三八修理右宮城使。同十二月十九左中弁、同八二十従四下（廿二才）。同人藏人頭。同三月一日従四上。同廿三日左宮城使。同九正九正四下。同三月廿四日造興福寺長官。同六月八日服解（母）。同八月一日復任。同十二廿九左大弁（于時為勅使在関東）。同十一三廿六去氏院别当。同壬三月廿造東大寺長官。同日丹後權守。同十三日正四位上（廿五才）。

と、詳細にその誕生以来参議任官までの経歴が尻付の中で記録されている。一方、大中臣家賢の上階に関しては、

従三位 大中臣家賢 へ六十一 三月九日叙。春日杜神主。

故正三位家統卿男。母。

とその尻付の中で僅かに処理されているのみである。堂上家出身者と杜家出身者との『公卿補任』における記載上の相違は右に

とどまらない。上階者の母親に関する記事に注目すると、堂上家出身者の場合は比較的克明に記されている。ここで掲げた資將のように外孫が養子となった場合は特別であるにしても、一樣に母に關しても記録しようという姿勢が強い。一方、社家出身者の場合は、大中臣家賢のように当該欄が空白になっているのがほとんどである。何故、社家出身者と堂上家出身者との間に、記載の上でこのように大きな差異が生じるのであろうか。理由はやはり、社家上階者の身分が基本的に地下扱いであったことに起因しているものと推測される。

こうした傾向は、室町時代の岩出流大中臣氏の從三位叙位の記事にも看取できる。岩出流の大中臣氏の人物で、他の堂上諸家の人物と同様、從三位叙位に際し、詳細な経歴が『公卿補任』に記録されるようになるのは、家号を藤波と改めた景忠の代からである。

五、結びにかえて

以上このように、岩出流大中臣氏は、伊勢国岩出に本拠地を構えていた中世を通じて、朝廷より基本的に地下の在地神職の扱いを受けていた。これが、高位の授与が、口宣案で行われた大きな原因と考えられる。このことは、換言するならば、伊忠がいまだ本拠地を岩出に構えていたことの傍証となろう。前に触れたように岡田氏によれば、伊忠は記録によって明らかな最後の岩出という家号を名乗った人物である。大永二年正月十九日付「後柏原天皇口宣案」は、そのことを傍証するものと考えられる。

最近社家官位の問題が種々議論されるようになってきた。しかし、こうした事実を踏まえると、『公卿補任』から軽々に社家官位の問題を論じることが難しい。広く、社家に下された口宣案を蒐集・整理することが、今後の課題であろう。

注

- (1) 「中世の大中臣祭主家」(『大中臣祭主藤波家の歴史』第三編 一九九三年)。
- (2) 岡田莊司氏『中臣祓註釋』解題(『神道大系』古典註釋編 一九八五年)。西田長男氏「中臣壽詞巧」(『神道史の研究』二一九五七年)。
- (3) 小松(藤森)馨「新発見の藤波家所蔵『中臣秘書(天神寿詞)』の紹介と考察」(『國學院大学日本文化研究所紀要』七〇輯 一九九二年)。藤森馨「古代の大中臣祭主家」(『大中臣祭主藤波家の歴史』第二編 一九九三年)。
- (4) 「口宣・口宣案の成立と変遷(二)——院政Ⅱ親政と天皇Ⅱ太政官政との接点——」(『古文書学研究』第15号 一九八〇年)。
- (5) 相田二郎氏『日本の古文書』上・下(一九四九・五四年)の上巻第二部「平安時代以来の公文書」。
- (6) 中村直勝氏『日本古文書学』上・中・下(一九七一・七七年)の上巻第四章「古文書の分類」。
- (7) 富田正弘氏「口宣・口宣案の成立と変遷(一)——院政Ⅱ親政と天皇Ⅱ太政官政との接点——」(『古文書学研究』第14号 一九七九年)及び注(4)前掲論文。

(國學院大学文学部兼任講師・図書館情報大学非常勤講師・藤森 馨)